みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　4月　14日　　NO.2

五代目桂文枝

大変な時間が続いていますが、みんなで乗り越えていくためにも、気楽な話をいくつかこの「通信」お話していきます。暇つぶしとしてご活用ください。

さて、30年以上も昔の話です。当時、落第ばかりしていて、気づけば20歳目前。働き始めた友人も多く、「これではいかん」と新聞配達をすることに。数か月後、がんばりが認められたのか、演芸のチケットを三枚もらいました。同じように浪人していた友人二人を誘い出し、今は無き浪花座へ。

会場に入ってびっくりしたのが、ほとんどお客がいない。真ん中あたりに座ったのですが、後ろのほうに老夫婦が一組。前のほうで半分鼾をかいているおじさんが一人。

出てくる芸人もそんな客席を見て、みんな最初は戸惑い、投げやりな感じで漫才をしたり、コントをしたり。

我々三人は、最後に出てくる予定の落語四天王の一人、桂文枝の落語を楽しみにじっと待っている感じ。

ただ、この客の少なさ。中止になるか違う人が出て来るのではないかと心配していました。

いよいよ、その時。あたりを見ると後ろの老夫婦はいつの間にかいなくなっていました。鼾のおじさんもいない。500人は入る大ホ－ルに客は、我々三人だけ。

出囃子が鳴り、桂文枝の登場。深々とお辞儀をし、正面を向くと「ほ-」と一言。そして、真ん中あたりに座っていた我々三人に「兄ちゃんらどうせやったら一番前においで」と手招きします。

恐る恐る一番前に座ると「せっかくやから、長いの聞かしたろ」と独特のだみ声で言います。

30分は続いたでしょうか。全身汗まみれで、一切手を抜くことなく落語を聞かせてくれたのでした。

その姿は、今でも心の奥に鮮やかです。